富士山資料館特別展資料集

岳人 渡辺徳逸翁

―富士と共に生きた人生―

平成19年度

裾野市教育委員会／裾野市立富士山資料館

はじめに

裾野市須山に生まれ、少年時代を富士の裾野で過ごされた徳逸翁です。しかし、青年時代には新しい時代の到来と共に東京に出られ大学に進学、時代の移り変わりの中で、世界各国からもたらされる新しい情報や知識を習得していきました。

大学卒業後、郷里である須山にもどり、人々の生活の改善や郷土の歴史や文化について調査しています。特に富士の自然や富士山須山口登山道についてもさまざまな観点から調査し、富士山にも何度となく登山し、山頂を極めております。しだいに、須山の渡辺徳逸翁の地道な研究と努力は認められ、徳逸翁との繋がりを求めて、日本各地から各界の著名人が須山の地を訪れることになります。

渡辺徳逸翁が郷土である須山を基点に、郷土の自然・文化・歴史や富士山について調査し、かつその研究によって深い繋がりを築き上げた各界の著名人とのかかわりを紹介することで、富士山をこよなく愛し続けた「岳人　渡辺徳逸翁」の活動の歴史に脚光をあてます。

もくじ

Ⅰ．渡辺徳逸翁の生い立ち
1．「岳人　渡辺徳逸翁」の生い立ち……1
「岳人　渡辺徳逸翁」略年表…4
2．徳逸翁を囲む人々……8
(1)　須山地区の皆様…8
(2)　裾野地区の皆様…12
(3)　裾野市以外の皆様…18
3．渡辺徳逸と東京外国語大学客員教授
ウイリアム・ヘーゲルとの出会い……23
4．愛鷹登山道の整備……23
5．須山地区地下水源の開発……24
6．実業家緒明圭造『富士山ケーブルカー計画』……24
7．渡辺徳逸翁と親交のあった方々……26

Ⅱ．山岳家や山岳研究者との出会い
1．日本山岳会員との出会い……27
(1)　登山家　小島烏水…27
(2)　登山家　冠松次郎…27
(3)　登山家　藤木久三…28
(4)　山の友としての小島烏水と冠松次郎……29

Ⅲ．文人、芸術家、各界の著名人との出会い
1．俳人　水原秋櫻子……41
(1)　徳逸と秋櫻子…41
(2)　松本破甍の役割…41
(3)　十里木句碑の建立の経緯…42
(4)　奇石博物館句碑誕生の経緯…42
(5)　水原春郎氏との交流…43
(6)　俳人　徳田千鶴子氏…44
2．歌人　川田順の横顔……45
(1)　順が訪れた萩倉家…45
(2)　鈴鹿俊子「黄昏記」より…45
(3)「ひぐらし」歌の誕生…45
(4)　順と徳逸の出会い…46
(5)　順、山麓を詠う…46
(6)　テイカカズラと順…46
(7)「カッコウ」と川田順…47
(8)　歌人　鈴鹿俊子……47
(9)「くわくこう」碑誕生の経緯…47
(10)「ひぐらし」歌碑の誕生…48
(11)　帰路の川田順一行…48
(12)　萩倉千佐恵の生涯…49
(13)　勝田見佐の役割…50
(14)　勝田家と徳逸…52
(15)　勝田甫（はじむ）…52
(16)「積雪季登山」再版序文より…52
(17)　富士山頂から初滑降……53
3．思想家　徳富蘇峰……54
(1)　蘇峰と徳逸…54
(2)「法自然」碑の誕生…54
4．漢詩人　国府犀東……55
(1)　犀東と富士山麓…55
(2)　国府先生の思い出…55
5．写真家　岡田紅陽……56
(1)　紅陽と徳逸の出会い…56
(2)　紅陽と富士山…56
(3)　傑作「朝霧」誕生の時…56
6．直木賞作家　新田次郎……57
(1)　新田次郎と富士山レーダー…57
(2)　新田次郎と須山の青年たち…57
7．評論家　山本健吉……58
(1)　健吉と徳逸…58
(2)「富士山麓」より…58
8．洋画家　近藤吾朗……59
9．画　家　大森明恍……59
10．グラフィックアーティスト　榎戸文彦……60
(1)　富士山を結ぶご縁…60
11．言語学者　柴田武……60
(1)　賢人　渡辺徳逸氏…60
12．雲の研究家　阿部正直……61
(1)　阿部博士の思い出…61
13．植物学者　牧野富太郎……62
(1)　牧野富太郎と徳逸の交流…62
14．地質学者　津屋弘逵……63
(1)　富士山と津屋…63
(2)　津屋から徳逸への書状…63

Ⅳ．特別展「岳人　渡辺徳逸翁」を開催して……64

Ⅴ．出品資料一覧……65

Ⅵ．協力者・参考文献一覧……66

あとがき……67

Ⅰ．渡辺徳逸翁の生い立ち

1．「岳人　渡辺徳逸翁」の生い立ち

渡 辺 徳 逸 翁

明治33(1900)年7月24日、静岡県裾野市須山に、父　正五郎、母　はつ　の三男として生まれる。

大正3年4月、須山村尋常高等小学校を卒業し、東京の青山師範学校に入学。当時須山村から東京の学校に行く事は大変な事であり、父　正五郎が教育に熱心であったことがうかがわれる。

大正6(1917)年青山師範学校3年の時、東京外国語学校の試験に合格して同学校に編入する。ここで出会った英国人教師ウイリアム・ヘーゲルのもとで翻訳を行う傍ら、山登りの魅力に取り付かれる。

この頃、奥多摩の山に度々入り山や渓流の素晴らしさに心を奪われ、故郷富士山の自然の重要性を考えるようになる。

東京でのハードな生活で体調を崩し入院、郷里である須山に帰ることを余儀なくされ大正8(1919)年帰郷する。

郷里須山に帰り富士山や地域の歴史等の研究に没頭する傍ら、須山の青少年の育成指導に情熱を傾ける。

昭和3（1928）年、愛鷹山鋸岳において遭難事故が発生したことを契機に、登山者の安全を願い愛鷹山登山道の開発を提言し、村を挙げて登山道を整備し、基地となる愛鷹山荘を建設した。

昭和14（1939）年、日本山岳会初代会長の小島烏水の勧めで、日本山岳会に入会、会員章番号1784号を受ける。この頃から冠松次郎との交流が始まる。

富士山研究をして行くなかで、須山口登山道が鎌倉時代から存在し、富士山を代表する登山道として栄え、地域にとっていかに重要であったか痛感し、須山口登山道の復活を地元民に説き、中央の山岳関係者に協力要請する等、60年以上に亘り粘り強く登山道復活運動を展開し、平成9（1997）年、85年ぶりにその実現をみる。

水利に恵まれず、水の確保に難渋していた須山地区であったが、交流のあった東京大学津屋弘逵教授の富士山地質の研究を参考に、昭和34（1959）年、須山の地下水掘削に成功した。

渡辺徳逸翁は、東京での生活や郷里須山での富士山や郷土の歴史を研究するなかで、さまざまな経験や人々とのつながりを築き上げていった。

山岳家～小島烏水、冠松次郎、藤木九三
地質学者～津屋弘逵、田村剛（国立公園協会）、小川孝徳（日本洞窟学会）
気象学者～阿部正直伯爵
写真家～岡田紅陽
画　家～武井真澄、大森明恍、近藤吾朗、榎戸文彦
文　人～徳富蘇峰、国府犀東
歌　人～佐々木信綱、川田順・俊子、石榑千亦

徳逸翁を紹介する東駿新報

◀左：岡田紅陽と共に
右：水原秋櫻子句碑除幕式にて

が又あるかもしれませんね。」としっかりした口調でお話くださいました。あの時が、先生との最後の面談となってしまいました。もっともっと、いろんなことをお聞きしておきたかったと本当に残念です。

でも、渡辺徳逸翁の富士山や自然に対する情熱は、富士山や須山口登山歩道を通じて、いつまでも裾野の皆様方に引き継がれてゆくでしょう。須山口登山歩道を介して知り合った裾野の皆様方との素晴らしい交流を、渡辺徳逸先生からのありがたい遺産と厚く感謝し、何時までも末永くつづけて行きたいと私たちも願っています。

3. 渡辺徳逸と東京外国語学校客員教授ウイリアム・ヘーゲルとの出会い

官立の東京外国語学校は、明治6（1873）年11月4日、第一大学区東京第四大区二小区一ツ橋通り町一番地に開設された。その後、明治17（1884）年3月に付属高等商業学校が設置されたり、翌85年に、東京外国語学校及び同校所属高等商業学校と東京商業学校が合併し、東京商業学校となったりするなどの変遷をへて、明治32（1899）年4月高等商業学校付属外国語学校が東京外国語学校（神田錦町3丁目14番地）と改称されるとともに、文部省管轄3官立専門学校の一つとして独立した。学科も英・仏・独・露・西・清・韓国の7学科に伊語学科を加え8学科、明治44（1911）年にはさらに5学科を加え13学科となり、大正5（1916）年1月葡語学科を設置し、14学科となっている。

明治30～40年代は、日本政府における欧化政策によりヨーロッパ文化が積極的に導入される時代であり、当時の専門学校の設立や国策にも外国人の投入が行われた。

このような専門学校の変遷のなかで、徳逸翁は大正6（1917）年、青山師範学校から東京外国語学校への編入試験に合格し、英語の勉学に励むのである。徳逸翁は、学校で英国からの客員教授であるウイリアム・ヘーゲルに学ぶ機会を得る。

徳逸翁は、ウイリアム・ヘーゲルが同学校の教授であり、イギリス山岳会会員であったことから、山の楽しさを教わっている。このことで今後徳逸翁が山岳に引き込まれるきっかけとなったと思われる。徳逸翁は、学生時代から山岳にめざめ、日本山岳会の創設にたずさわった登山家小島烏水と交流をもった、と述べていることからもこの出会いの重要性が推測される。

徳逸翁は、大正8（1919）年東京外国語学校での厳しい生活の中で身体上の理由から、郷里である須山へもどることになるが、ウイリアム・ヘーゲル教授とは翻訳の仕事を通じて交流があった。

郷里での富士山研究や郷土の歴史や文化の研究に没頭し、富士山の自然保護や地域の開発、歴史文化の継承と掘り起こしを長年にかけて推し進めることができたのは、この東京での経験と人々との出会いがあったのである。

4. 愛鷹登山道の整備　～松永青年の遭難をきっかけに～

「愛鷹山荘建設」

愛鷹山は昭和の初めの頃は、炭焼きや猟師以外の人達には魔の山と言われ、山奥には行かなかったようです。

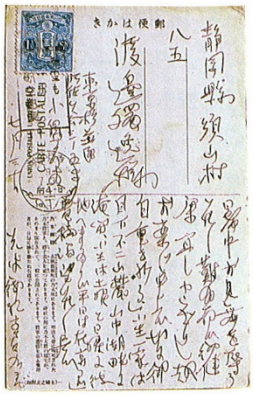
昭和3年の秋、静岡商業高校3年生松永敏夫君が友人と二人で、日帰りの予定で原駅で下車し愛鷹山へ登ったのですが、天候の急変により道に迷い下山予定とは反対に進み、迷いに迷って鋸岳で遭難しました。この事故は須山始まって以来の遭難事故でした。この悲惨事に、登山道さえあったらと、登山道の企画、設定の中心となったのが当時の県立御殿場実業学校通学中の須山学生団、勝又清士・勝呂志三・桜井金次郎・宮崎文平・杉山文雄・土屋秀男の六氏でした。また、青年団も協力し途中からは挙村一致で整備し縦走コースと横断コースが昭和6年に漸く完成しました。これがまた一つの動機となって須山の青年達が休みのときに共に語り楽しみ合うため小屋を造ろうと言う意見が出て、越前岳と黒岳との最低鞍部下に小屋を建てた、そこには岩清水「銀名水」の名が付いた水場があり、まろやかな清水で喉をうるおすこともできました。更に一般登山者のためにと渡辺大治が責任者となって拡張して作られたの

(4) 山の友としての小島烏水と冠松次郎

――徳逸に届けられた多くのはがきから――

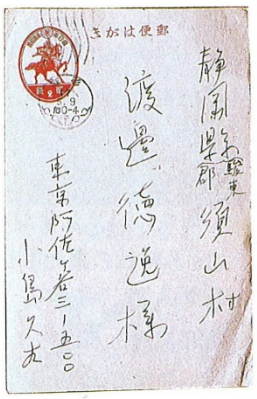
① 小島烏水との交流

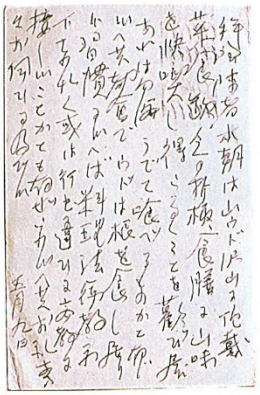
小島烏水と徳逸との出会いは、東京での学生時代から小島烏水との交流があったと、烏水との思い出の中で述べていることから、徳逸が登山に魅力を感じとってからの交流と考えられるが、徳逸が青山師範学校に入学した年が大正3（1914）年、東京外国語学校に入った年が、大正6（1917）年である。その頃の烏水は、横浜正金銀行に入行していて、大正4（1915）年7月には、横浜正金銀行ロサンゼルス分支店長として米国に渡っているため、徳逸が本格的に烏水と交流が深まっていったのは、烏水が米国から日本に帰国した昭和2（1927）年3月以降となろう。また、烏水が昭和5（1930）年8月に横浜正金銀行を退職し、豊年製油株式会社の監査役に就任後、さらに昭和6（1931）年5月、烏水が日本山岳会初代会長に就任した頃とも考えられる。



東京都杉並区阿佐谷三―五〇〇
小島久太
暑中お見舞いを願う
〇〇〇
御健康宜しからざりし〇
お案じ申し上げ候切に御
自重を祈る。小生一家は
目下不二山麓山中湖畔に
滞留、小生は土曜と日曜は彼
地へまゐり候　平日は在京に候
〇〇〇

烏水と徳逸との交流が明確に記録として残っているのが昭和9（1934）年7月30日付け、烏水60歳の時のはがきである。住所は東京杉並区阿佐ヶ谷3丁目500番地で小島久太の本名で発送されている。内容は、暑中見舞いの挨拶文に、烏水一家が富士山麓の山中湖畔に滞留し、自分は土・日は彼の地（富士山麓）に来ている。平日は在京にて仕事に追われている。と記している。烏水はこの頃は豊年製油株式会社監査役として、また執筆活動もさかんであったと思われる。その後も、昭和12（1937）年8月15日付けで、家族で山中湖畔に来ている。昨日は富士の西麓をめぐった。今日の日曜、私は東京へ上り、再び煙塵の人になる。と記している。この他、13年7月持病で床に伏せていること。14年6月には別冊『アルピニストの手記』を発行し、一読を願いたいこと。などが、記されている。





静岡県駿東郡須山村
渡辺徳逸　様
東京阿佐ヶ谷三―五〇〇
小島久太
拝啓陳者本朝は山ウド沢山に頂戴
菜食〇〇の折柄食膳に山味
を快喫し得らるることを歓び居候
あれは無論うでて食べるものかと存じ
候へ供都合でウドは根を食し居り
候習慣に候へば料理法御教示
されたく或は行も違ひに〇〇〇
接し候ことかとも有ぜられ候共お礼方々
お伺ひ〇〇〇候　五月九日

昭和15（1940）年には、徳逸が愛鷹に建設した山荘について、冠松次郎から話しをきいた。この建設事業について頭がさがる思いである。また、徳逸が送ったアシタカツヅジは、丈は低いが、若葉がたくさん茂った。との内容が記されている。愛鷹山荘建設は、昭和3年に愛鷹登山を行っていた静岡市出身の若者が夜間道に迷い遭難、一人の尊い命を奪われたことを教訓に、徳逸が長年にわたって計画を進めていた事業の一つである。烏水も冠松次郎も先の遭難事故に心を痛め、この『愛鷹山荘』建設について喜んでいたと思われる。もう1通の烏水からのはがきに、「愛鷹山荘での新緑、または紅葉の頃のよさを想見して、脳中おのづから万華鏡をてんじ来る空想する心に嬉しい」と記している。